

本を選ぶ

NO.430 2021年(令和3年)3月20日

●発行/ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん> Ruby ー続々ー

●鳥の目 84

●最近の経済学は、こんなに面白いんです!

●読者のため? 自分のため?

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

Ruby ー続々ー

寒暖計が落下して割れてしまい、枠だけが残って30年になる。なんとも間の抜けた話ではあるが、日に一度は眺めて暮らしてきたから、枠しかなくてもずっと壁にぶら下げたままだった。このたび思い立って棒状温度計をさがし出し、付け替えて再生させてみようと思論んだ。表示は50度からマイナス30度まで、長さ60cmもあるから簡単には見つかるまいと覚悟したが、ほどなく、温度計の専門メーカーに行き着いた。

予め問い合わせメールで事情を伝え、在庫を確認してから出向いてみた。対応してくれた測定器メーカーの担当者は早口だった。ボツセンが入っています、サイズは良さそうですね、赤液になりますが大丈夫ですか? 有償ですがコウセイシヨウメイシヨウは必要ですか?

ボツセン? 矢継ぎ早の問い掛けに当方がへどもどしている、担当者は、測定用ではなくてご家庭でお使いですか、と言葉を改めた。はい、家庭用です。でしたらコウセイシヨウメイシヨウは要らないですね。こんな会話が續いて少々面食らったが、当方が所望する品が手に入ったところでよしとする。

もっともコウセイシヨウメイシヨウなる言葉には

こちら心当たりがあった。きっと校正証明書なのだなと思に至る。と言うのも、少し前に物置の古い道具箱から昔のノギスと、もうひとつ使い方の分からないマイクロメーターという測定器具が出てきて、木箱には「校正証明書」が添えられていたのだ。一昔前には校正とも書いていたのか。推測するに「この測定器具は正しく測定してその結果を表示する」といういわば保証書付きというやつではなかろうか。

いや違います、測定器具の校正証明書とは保証するのではなくて、法律の定める基準に照らして測定の精度を法律の定める手順で証明するのであって、誤差の範囲も含めて提示しています、だから修理したり調整したりはできません、つまり電化製品の保証書のように故障に関して無償修理を保証しているわけではありません、と担当者氏。

校正(較正)とは言っても、印刷物に対する校正とは意味合いが異なるのは何となく理解できた。この場合校正には基準があつての話。その基準を細かく法律で規定しているらしい。ならば印刷物の校正とは何なのか。原稿があつて、それを活字組版で正しく再現しているか引き比べるのが校正という作業だ。原稿と違っていれば校正紙に赤字を入れる。直し方の指示は校正記号を使って正しく印刷所に伝わるように表示する。例えば、トルツメとかトルママ、イキ。まだまだある。

ところで、ボツセンとは? ああ没線ですね、この線まで温度計を測定対象に入れて下さい、という印です。へえー、そういうことか。(埜村 太郎)

鳥の目 84

——スズメの「クラレンス」を思う——

為貞 真人

「いとしのスズメよ」

「クラレンス その名もほまれ高き いとしのスズメよ 1940年7月1日生 1952年8月23日没」と刻まれた小さな墓石のイラストが載る本があります。その墓石は今もあるのでしょうか。とっくに消え失せていても、12年と7週4日の長寿を全うしたスズメ、「クラレンス」の記憶は世界の読者から消えることはないでしょう。

日本でイギリスのクレア・キップス夫人の著作 *Sold for a farthing* が『ある小さなスズメの記録 人を慰め、愛し、叱った、誇り高きクラレンスの生涯』と題し、作家の梨木香歩さんの新訳で文藝春秋から発行されたのは2010年11月10日です。本書は1953年英国で出版されるやいなやベストセラーになり、日本を含め世界の多くの国で翻訳出版されました。梨木さんの新訳発行が3.11東日本大震災の4か月前であったことに、ある感慨を覚えます。記者あとがきで「かつて、人の傍らに在って今は亡き、すべての『同伴者』たちに、このささやかな訳業を捧げたい」と書かれているからです。

本書に記録されたスズメは野生のイエスズメ (House sparrow) です。日本で普通見られるスズメ (Tree sparrow) より少し大きく、頬の黒斑がなく、雌雄で羽色が違いますが、スズメと同様に市街地や農耕地で人間に寄りそって生きる鳥です。

記録に当たって

序文でキップス夫人はこの記録について、自分と生涯をともしたスズメについて記しておくようしばしば人々から勧められたが、ためらってきたのは、「人々がそれを読んだ結果、生き物を捕えてその自由を奪うケースが増えるのではないかと懸念したからである。私は野生の鳥は基本的には野にあるべきだと思っている」と述べ、そのうえで、本書を書くにあたって「信頼するに足る忠実な記録となるよう、誇張も避けるべく、できるだけ心がけ」「この小鳥の行動に対する私の解釈には、思

い入れが強すぎると思われるかもしれないが「少なくともそれは、よく調べた観察の結果なのである」と述べられていることは、本書を読むうえで重要です。

だからこそキップス夫人は「これは愛玩動物の物語ではなく、人間と鳥との間に培われた親密な友情の物語である」と自信をもって言いかけたのでしょう。

拾い子

クラレンスの記録は、ヨーロッパで第2次世界大戦が始まって間もない頃、ドイツ空軍がイギリス本土への大空爆を開始する直前の1940年7月1日から始まります。ピアニストであるキップス夫人は、この日の夜、空襲に備え市民防衛隊の一員として警戒中のロンドン市内の民家の玄関前で、丸裸の瀕死状態の小鳥のひなを拾いました。

キップス夫人が拾った小鳥のひなは、数時間前に生まれたばかりで、巣から落ちるか投げ捨てられてもしたかのようでした。温かいフランネルでつつみ、数時間の間台所の炉辺に座り続け、生き返らせようと懸命につとめました。やわらかなくちばしをなんとか開き、数分ごと小さなのどに温かいミルクを一滴流し込みました。

30分後、体はまだひどく冷たいままですが、片方の羽がかすかに身じろぎするのに気づきました。小さなプティング鉢に毛糸を敷いてひなを入れ、温かな衣類乾燥戸棚にしまいましたが、希望はもたれず、夫人は諦めながら眠りに就きました。驚いたことに、翌日早朝、かすかだけど絶え間ない声が聞こえ、小さな生きものが、熱烈に生命力に溢れて朝食をねだって鳴いていたのです。

3日目、「ぎょろぎょろとした出目の両方に裂け目ができ、それが次第に大きくなり羽毛のない私の顔と止まり木のような指に向けて開いていった」のです。この小鳥のひなが見た初めての生き物はキップス夫人でした。「何の疑いもなしに私を自分の保

護者として自然に受け入れたのだらう」と夫人は書いています。この小さな野生が「運命の女神」と出会った瞬間でした。

夜は夫人の枕の上に置いた毛皮の手袋の中で眠り、夜明けにチュンチュン騒いで髪の毛を引っ張って起こしては、朝食をせがむようになりました。ひなが自力で飛び、かつ食料を確保できるようになれば、すぐに外へ放すつもりでしたが、翼の羽が生えそろうにつれ、悲劇が明らかになりました。右翼の主羽が背中からまっすぐに小さな扇のように突き立っていたのです。左足も変形して曲がった蹴爪もっていました。

おそらく親鳥からも見放され、自然では生き残れなかった小さな「いのち」が、いかなるわけか自分の手のひらに託されたら、夫に先立たれた孤独な彼女が思っても不思議はありません。

ひなが自分で食事ができるようになり、夫人が外出して帰ってくると足音やドアのかぎの音まで聞き分けて大騒ぎで出迎え、興奮気味にしゃべりたてながら、脚をよじ登り、肩へ到達、頸や襟の中に潜り込みます。また夫人のベッドはこの子の天国であり、このことは彼の生涯を通じて変わりませんでした。こうしてこのスズメの赤ん坊時代は幸福に過ぎていきました。

俳優デビュー

1940年9月、ロンドンへのドイツ空軍の大空襲が始まりました。月末近い頃、キップス夫人宅のすぐ裏に時限爆弾が落ち、隣家が土煙の中に崩れました。市民防衛隊の任務から解放されると、夫人は真っ先に飛んで帰り、「坊や、だいじょうぶ？生きてる？」と叫びました。すぐに小さな返事があり、床は割れたガラスで覆われ、鳥籠の屋根がレンガで壊れて穴が開き、垂れ下がった屋根すれすれのところでブランコに乗ったスズメの子は平然としていました。

夫人は地区の空き家に引っ越し、ロンドンの貧しい地域の救援要員の任務に就きました。夫人は街の人々の不安をいやし、子どもたちを慰めるために、

スズメに芸を教えて演じさせることを思いつきません。さっそくスズメを手のひらに載せ、彼が嫌がらないことを確かめ、お気に入りのおもちゃの助けを借りて、いくつかの簡単な芸を教えました。彼は驚くほどやすやすと、あつというまにそれを自分のものにしたそうです。

夫人とスズメはいろいろな防空監視所や休養センターなどに出かけ大歓迎されます。家を失くした人もおびえた子どもたちも、少なくともしばらくの間は不幸を忘れることができました。「あの過酷な月日を、彼ほど忠実に、そして着実に、自分の国に仕えたスズメは、未だかつて一羽もいなかっただろう、と私は心の底からの誠を持って言うことができる」と著者は回顧しています。

彼の芸はなじみのプディング鉢に落ちて座っているところから始まります。座席の最前列の人々から麻の実をごちそうになると、バレエ・ダンサーのように軽やかに踊り出すと、突如幼いヘレクレスに変身して夫人を相手にヘアピンで綱引きを始めます。勝ち取ったヘアピンを勝利のトロフィーよろしく得得と鳥籠に運び入れます。

その他カード回しなどいくつかの演目の中で最も人気があったのが「防空壕」です。左の手のひらに右の手のひらをカップの上蓋のように置き、「サイレンだ！」と言うだけで彼はそこに飛び込み、数分間じっとしています。しばらくして警報解除のサイレンはまだ鳴らないのと言わんばかりに頭だけちよんと突き出して辺りをうかがいます。このパフォーマンスが戦時下の子どもたちに特に喜ばれました。

雌雄が不明でしたが初めての換羽後、淡灰色の胸に雄の印の黒い紋章が現れ、有名役者になったこのスズメの子の命名が問題となり、子どもたちの提案で「クラレンス」と決まりました。

音楽家として

ある晩、夫人とクラレンスは空子どもたちのパーティからの帰り、道に迷い、被爆した駅の引き込み線の爆弾孔に落ち、泥水の中で一夜を明かすという危険に遭遇しました。1941年春、演芸会へのクラレ

ンスの態度の変化に気づいた夫人は、「優雅な引退」を選び、クラレンスの意思を尊重し、子どもの頃から変わらぬ二人の「室内活動」に戻りました。

クラレンスは料理中の夫人を観察しながら、スプーンから味見し、ピアノを弾く彼女の手の上に止まって耳を傾け、読書の時は手首の上に落ちていて、指し示す文字を見つめ、また一人遊びも楽しみ、野外のスズメに比べ一段と色鮮やかな美しい小鳥になりました。

彼が最初に歌い始めたのは1941年1月、生後6か月でしたが、「発する言葉の大部分は、普通のスズメのものであり、同時に普通のスズメのものではない」という事実で夫人は気づきました。

彼が幼児期を脱した頃から、夫人が非番の日はいつも彼を肩に止まらせ、グランドピアノを1時間以上も弾いて聞かせました。彼は最初から音楽に体全体を震わせて反応しました。ある朝、一風変わった可愛らしい歌が聞かれ、それはさえずりから始まり、小さなターンを経て、メドレーを形づくろうと試み、高い音色を出し、そして「驚異中の驚異！」小さなトリルに至ったのでした。夫人は魔法にかかったように聞きほれたと言います。

夏が過ぎていくにつれて練習時間が増え、初秋に入ると彼の歌はいよいよ洗練され、完成度を高めます。「彼にそれぞれの曲の区別がついていたと言うつもりはないが、いくつかの曲は間違いなく彼に特別のアピールをし、その感情の爆発的な表出を導いた」と数年続いた二人だけのリサイタルの日々の喜びを語っています。

彼はいつも早朝に一番素晴らしい歌を歌いました。夫人がピアノの最高音部で、より速く、より高く弾くに従い、「ヒバリのように恍惚として、魂を注ぎ込んで」歌い上げました。

クラレンスの愛

キップス夫人はクラレンスと自然との関係については常に自分に問いかけていたようです。「戸外の鳥たちを彼に見せなかった方が、ずっと賢明で親切なことだったのではないか」「そうしたら、彼はたぶん、最後まで大人になった雛鳥のままを生き、私

との共同生活をおそらくもっと満足しきっていただろう」と。

生涯の最初の4年間は、よく窓の敷居のところに止まったり、遊んだりしていましたが、窓の向こうのものにはちっとも興味を示さなかったそうです。窓際の鳥籠の中のクラレンスが、野の鳥たちと親密になってくると、いろいろと影響を受け始め、第一に教わったのが「恐怖」でした。猫を目にすると、以前は無関心だったのに、パニックに陥るようになり、頭上に物をかざすとタカの攻撃を怖れるように身をすくめるようになりました。

恋の季節にはコマドリ、アオガラ、スズメなどの雌がひっきりなしに訪れ、クラレンスに愛を宣言しますが、彼は全く無視しました。

しかし、3月から10月の間、彼は夫人に愛を仕掛けます。翼や尾を広げ、誇らしげにしゃなりしゃなり気取りながら、夫人の手から腕にかけて上ったり下がったりし、また冠羽を立てて夫人を見上げ、何度もお辞儀を繰り返します。

わくわくした興奮の一日の終わりには、幼いころと同じように夫人のところへ飛んできて、小鳥の目がこんなにも情感豊かだったのかと思わせる表情で見上げるのでした。

老いと最後の日々

11歳になるまでクラレンスは一日も病気をしたことがありませんでした。だが11歳の誕生日が過ぎた頃、足が弱り始め、夜中止まり木から落ちたり、時折ヒステリーの発作が起こすようになり、ある朝気を失って倒れました。鳥専門の獣医師の診断では主因は老化、腫瘍の疑いもありました。薬による治療で1週間も経たず視力が戻り始め、羽も抜けなくなり、微かな希望の光が灯りました。ほんの小さな骨と羽毛の塊になったクラレンスは、それでもまだ健気に夫人の声のする方にその小さな頭を向けようとします。

奇跡的に回復したのは、「彼は明らかに生きる意志をもっており」そして「私たちがなんとか彼を助けようとしていることが分かっていた」と夫人は言います。そして「病気をした後、それ（*7頁へ）

最近の経済学は、こんなに面白いんです！

— 『経済学を味わう』 —

尾崎 大輔

コロナ禍の2020年4月、『経済学を味わう』が誕生しました。この本は、東京大学経済学部の教授陣による、1、2年生向けオムニバス講義をもとにした一冊です。講義のねらいは書名どおり、「経済学を味わう」こと。経済学は「市場主義」や「市場に任せておけばうまくいく」と考えている学問というイメージが根強いですが、実際は違います。むしろ「市場に任せただけでは不十分で、「どうすれば皆を幸せにする社会の仕組みが創れるのか」を考える学問です。この講義と本は、どんどん進化する経済学の最新の姿をダイジェストで味わっていただくために編まれました。

東大では、新生は全員まず教養学部部に所属し、2年次の「進学選択」により、3年次から進む学部を選びます。ところが、実際に学部を選ぶ2年生までの段階で、最近の経済学の動向に触れる機会は少なかったそうです。また、経済学を活かせるキャリアもたくさん存在します。実際、国際機関や政府機関、シンクタンク等はもちろん、最近ではIT企業でも経済学を専門に学んだ人たちが活躍するという話あるのですが、新生などにはこの点もなかなか知られていません。

この講義が始まるきっかけもユニークで、学生がトリガーを引きました。すでに経済学部に進んだ学生の中に上記の点を問題だと感じる方々がいて、「経済学を学んでどんなキャリアが拓けるか知らなかった」「もっと早くから最近の経済学を知りたかった」という声を、経済学部の先生方に伝え、これがきっかけとなり講義の実現につながったのです（このエピソードは本書の「はしがき」参照）。講義の内容検討や実際の運営でも学生の方々が活躍しました。私自身も彼・彼女らと直接お話し、「経済学のことをもっと知ってもらいたい」という強い情熱に刺激を受けました。

私もほぼ毎回、この講義を聴講しました。講義を通じ、ゲーム理論やマクロ経済学などの基礎科目、データを用いて社会で見られる様々な事象の原因と結果の関係を突き止めるためのテクニックから、貿易、都市問題、貧困削減、ファイナンス、企業間の競争ルール作り、会計の仕組み、さらには歴史上の出来事を経済学で読み解いて現代の課題へのヒントを得るアプローチまで、

多様な経済学の姿を知りました。

今まで知らなかった経済学の新しい姿に、年甲斐もなく興奮してしまいました。講義後、学生さんたちの大きな拍手が鳴り響くこともしばしば。この講義がスタートした2019年度は525名、2020年度はオンライン授業ながら1000名を超える受講者が集まり、東大としては異例の多人数に、教室や通信環境の確保が大変だったそうです。

こんなに面白い講義、東大の中に閉じ込めておくのはもったいない！

そんなわけで『経済学を味わう』を刊行しました。執筆陣は、国際的に活躍する研究者ばかり。皆さん、経済学の最前線の議論を伝えてくれます。一般的な入門書と違い、実は高度な内容が混ざっている点も特徴です。一見敷居が高いのですが、裏を返せば私のような一般人にはなかなか知りえないフロンティアの世界も覗かせてくれるということでもあります。

講義の臨場感や熱気を本に閉じ込める作業は、難しくもあり、楽しいものでした。編著の教科書的な内容でありながら、2020年末に週刊ダイヤモンド「ベスト経済書2020」で第2位に選ばれるなど、嬉しい反響もありました。ぜひこの本で、一人でも多くの方々に経済学の面白さを味わっていただけたらと願っています。

（おざき だいすけ：日本評論社）



『経済学を味わう』／市村英彦・岡崎哲二・佐藤泰裕・松井彰彦編／四六版並製／304頁／定価1980円（税込）／日本評論社

読者のため？ 自分のため？

溝上 牧子

会社ではホームページがあり、このホームページを開設した当初、ああでもないこうでもないと考えた時のことを時々思い出す。まだ20代だった頃のことだ。その当初は出版点数もごく僅か。どんなページだったら人は見に来るだろうか？ とない頭で考えた結果が今の基盤になっている。

皆で考えたのか、自分が案を出したのか、今となっては思い出せないが、ただの目録や情報だけでなく、読者が面白く読める記事や、イベント情報、著者の著作リスト等、読者が楽しめ、且つ、来てよかったと思えるページにしたかった。大手の出版社では作家の連載あり、読者の感想あり、広告の仕方も凝っているし、出版点数も多いから自然と情報も多く見栄えがした。では点数が少ない我が社には何が出来るだろう？ 予算もない中で面白くするには記事を載せることかなと考えた。社員がやれば、手間はかかるがお金はかからない。そうして生まれたのが、「王様の耳はロバの耳」であり「この本おもしろかったよ！」だった。

前者は社員たちが普段感じていることを誰の顔色も気にせず書くつづやきのようなもの。もちろんあの童話の中から名前をいただいている。通称ロバ耳。これは週に1回のペースで皆が参加することになっていたが、時々さぼる…いや…さぼってばかりか。一番ちゃんと書いているのは社長だろう。よくもまあネタがあるものだ后感心する。

そして後者の「この本おもしろかったよ！」はというと、その名の通り、スタッフ達が自分が読んで面白かった本を紹介するコーナー。この機会にスタート当初からのアーカイブスをたどってみた。初めのうちは6人くらいで月に1冊か2冊、1年間で平均20数冊程度紹介していたようだ。全く紹介できない何年が挟まって、現在はメンバーも減ったこともあり、今はなるべく月に1回のペースを守れるよう目下努力中だ。自社本の紹介は営業くさくなりがちだが、このコーナーではどんな本を紹介してもいいので、純粹に自分が面白いと思ったことを素直に書けるのがいいところだ。こ

のページを訪問して下さる読者が本を読むときに参考になればと願い、そして根っこのところでは少しでも出版界が盛り上がることを願う夢が込められているのだった。そうなれば、いつか自社の本も盛り上がるはずだとどこかで考えていたのだ。改めて2つの内容を読み直すと自分たちの文章の変化や時代のながれ、人の動き（社内の）が垣間見えて面白かった。

ここで紹介した本の数を数えてみたら1999年1月のスタートから数えての2021年1月までの22年間に228冊（数え間違えていなければ）紹介していた。読者のためにと思ってきた活動だが、果たして本当に読者の役にたっていたかはわからない。しかし、このことを続けてきたことで、心を平静に戻す時間ももっていたようにも思う。書くとはそんな良い作用ももたらしてくれる。もちろん外に向けて発信しているものである以上、誰かに見てもらいたい。いろんな本をただ読むだけだったら、この本を読めてよかったとか、心の中で起こった変化は自分だけのもの。けれど人に紹介するとそのことで自分の気持ちが外に開かれるような気がする。それは口に出して伝えることもそうだが、そこで化学反応が起きるのかもしれない。酸素にふれた火種の様に。

先日、本の紹介の当番だった私は、今は絶版だが子ども時代から今まで事あるごとに思い出す古い児童書を紹介した。ビル・ピートの『ワンプのほし』（佼成出版社）だ。大人になり作品だけでなく、初めて作家にも向き合った。どうやらこの1冊しか今まで読んでいない。調べてみたら沢山の作品を書いて（描いて）いた。その中には自伝もあり、彼はウォルト・ディズニーのもとで長く映画に携わっていた人だった。自伝も物語も、絵本もどれも面白く、私は鼻息は荒くなった。こんなに面白いものを描く人がいたのか！と。読者に向けてと言いながら、やっていることのほとんどは、いつのまにか、自分の血や肉になっていたことに気づいた。（みぞかみ まきこ：朔北社）

(＊4頁から)以前の何年間にもまして、スズメは私の忠実な友となった」と確信しています。彼は過去の栄光の日の姿を一切失ったが、今を「満ち足りていて、何の後悔も見せなかった」と夫人は記録しています。

一日中、クラレンスは夫人の声の響きに聞き耳をたて、それが聞こえている限り、安心なのです。彼は、過ぎ去った日々のひなの時のように夫人を呼んで部屋から部屋へとついて回るのです。「私は彼の世界のすべてになった」とクラレンスの最後の日々を回想しています。

クラレンスは本書が書かれた4か月後に死にました。「耳はまだしっかりしていたが、目の方はすっかり見えなくなっていた。立つには衰弱しきっていたが、二回ほど、健気にも勇気を奮い起こして、立とうと試みたが、それもかなわず、私の温かい手の中に静かに体を横たえ、数時間じっとしていた。それからふいと頭を上げると、昔から慣れ親しんだ格好で私を呼び、そしてうごかなくなった。」—終章のこの一節にキップス夫人のクラレンスへの尽きせぬ思いが込められています。

(ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会)